

第5回リндаウ・ノーベル賞受賞者会議（経済学関連分野）

所属機関・部局・職名： 名古屋大学・高等研究院・特任助教

氏名： 古村 聖

1. ノーベル賞受賞者の講演を聴いて、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名（3名程度）を挙げ、記載してください。〕

【全体的な印象】

ノーベル賞受賞の研究に関する基本的な内容から、現在進行中の研究を紹介するものまで、それぞれの受賞者が自分のスタイルで話していた。講演の内容は、どれも興味深かったが、新たな研究内容を紹介する際にも、現代社会を経済学の新しい切り口で説明しようとしている視点が経済学のしきたりを守りながらも、思いつかないような斬新なものだったので、受賞者はこう考えるのかと考への深さや洞察力の鋭さに衝撃的を受けた。また、研究の紹介だけでなく一部の講演では、若手経済学者へのメッセージや課題が与えられ、教育の場としてもすばらしい講演であった。

最後のパネルディスカッションで、若手研究者が経済学をより役立つものとして使うために必要なこととして、ダイヤモンド教授とマートン教授は、実世界に自分が飛び出していき、現実を理解する努力が必要であると説いた。一方で、ロス教授は、自分の身の周りに当たり前に存在しているものをあえて経済学の目で見つめ直すことの重要性を指摘していた。どちらも大切なメッセージであったが、それぞれの意見が対照的で面白いと感じた。

【アルヴィン・E・ロス教授】

必要とする者がいる一方で、その取引を倫理的に受け付けない人がいる臓器売買などの市場がどのように機能し、そしてどう機能すべきなのかというのを議論していた。法的に禁止することが必ずしも正解ではなく、需要するものが存在する限り市場は必ず変化し、時代とともにその市場を理解する必要性が出てくるとしていた。感情的には受け入れにくい市場取引に関して、冷静な経済学のアイデア・視点を入れて分析してすることの大切さを知ることができ、非常に勉強になった。

【ジョゼフ・E・スティグリッツ教授】

不平等や格差がどのように生まれるのかをマクロ経済学的視点で議論していた。格差を広げ得る様々な経路を説明していたが、家族の存在によって格差が世代を通じて拡大していくという説明が興味深かった。話は非常に直観的で想定している経済モデルをイメージしやすい講演だった。

【ピーター・ダイヤモンド教授】

講演の内容としては、ベバレジアンカーブを時代や国ごとに比較していた。講演中一番印象的だったのは、ダイヤモンド教授の若手経済学者へのメッセージであった。理論モデルを構築する上で、よいモデル、悪いモデルというものは存在せず、自分が解決したい問題を捉えることのできるモデルがよいモデルであり、それが他の問題を解決する上でよいモデルであるという保証はどこにもなく、万能でないことを意識すべきであると説いた。自分の限界を知ったうえで、謙虚に分析を行うことの重要性を語るなど、教育的なメッセージも受けることができた。

2. ノーベル賞受賞者とのディスカッション、インフォーマルな交流（食事、休憩時間やボート・トリップ等での交流）の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。〔全体的な印象と併せて、特に印象に残ったノーベル賞受賞者の具体的な氏名（3名程度）を挙げ、記載してください。〕

【全体的な印象】

ノーベル賞受賞者とは、質問項目にあるように、たくさん話す機会があった。しかしながら、どの若手研究者もアグレッシブに話したりしているので、中に入っていくのには若干勇気が必要であったが、受賞者たちはみな私たちに視線を合わせ丁寧に話を聞いたりアドバイスをくれたりした。ディスカッションの場では、自分の立場を明らかにした上で非常に慎重に議論する受賞者や、経済学視点でもって、どんな学生の疑問にも対応する受賞者の議論の方法もありどちらも勉強になった。

【ピーター・ダイヤモンド教授】

ディスカッションでの参加者とのやり取りが非常に丁寧であった。失業に関すること、マクロ経済学に関することなどさまざまな質問が飛び交ったが、一つの質問に対して時間を10分から15分くらいかけて答えていた。参加者が自由に質問するディスカッションの場で、フロアから出た質問に対して何も見ていないにもかかわらず、書いた文章のように非常に組み立てられた回答をしていて、衝撃的であった。自分の研究によって答えられるものに対して丁寧に答えてくださる一方で、非常に慎重に言葉を選びながら、自分の研究対象から外れるような質問が出たときには、答えられないと否定するなど謙虚な印象を受けた。レクチャーで私たちに教えてくれた自分の立場を明らかにした上で、答えるべき問題を解決するというのは、こういうことなのだ実感した。

【アルヴィン・E・ロス教授】

ディスカッションの場は非常に多くの参加者が集まり盛んな議論が行われた。内容がセンシティブであるがゆえに、私の印象では最も熱く、自由な空気であったように思う。一人ずつ参加者が質問し、答えていく形式であった。一番おもしろかったのは、「教授の話している望まれない取引」はどれも人によっては当てはまる気がするが、具体的な定義は何かというものであった。どちらかという、なるほどと聞いていたのだが、あえて提示された枠組みをクリティカルな視点で見るとを忘れてはいけないと反省させられた場面であった。

【ジェームズ・マーリーズ教授】

ボート・トリップ中に、マーリーズ教授と話す機会があった。自己紹介を込めて所得税に関する自分の研究について紹介したら、真剣に聞いてくださった。それからどんどん他の参加者も合流し、みなで各国の所得再分配について議論することになった。講演では非常に理論的な話であったのに対し、ボート・トリップ中にマーリーズ教授とみなで話したことは現実的な話だった。マーリーズ教授は、みな意見をまとめながら、それぞれの学生に対し、「君の国はどう？どんな制度があるの？」と一人ひとりの意見や話に耳を傾け、聞いてくださった。国際交流の場で毎回思うことだが、やはり自分の国をまず理解することは本当に重要であると再確認した。

3. 諸外国の参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

諸外国の参加者との交流の中で強く感じたのは、学問を通じた世界というのは思っていた以上に狭いということである。このように考えた根拠は二つある。

第一に、世界中の学生がそれぞれ異なる関心を持っていながらも、経済学という学問によって、通じ合えるという感動を感じることができた点である。会議中、非常に多くの参加者と話したり議論したりする機会を得たが、特にアフリカ諸国出身の参加者と話した時に、少子高齢化と人口爆発という異なる人口問題を抱えている一方で、経済学を軸にどのような政策や慣習が存在しているのかを意見交換したりすることができ、非常に勉強になった。また、資料から読み取ることの難しい、発展途上国の人々がどのような感覚を持って生活しているのかということを知り、同じ経済学者という立場で議論できたことは、遠くに感じる世界を近くに感じさせる経験であった。

第二に、昨年度アメリカで行われた院生を対象としたプログラムで会った参加者と再会できたということである。学会に行けば何度も会えるのかもしれないが、国内だけでなく国外においてもこうした経験ができるのは、学問の世界が本当に狭いのだと思った。今後は、新たに得たネットワークを活かしながら、こうして得たアイデアを研究につなげていけたらと思う。

4. 日本からの参加者とのディスカッション、インフォーマルな交流の中で、どのような点が印象的だったか、どのような影響を受けたか、また自身の今後の研究活動にどのように生かしていきたいか。

私たち日本からの参加者はみなほぼ初対面で、かつ研究分野は異なるものであったが、すぐに打ち解けることができた。朝や夜などプログラム外の時間では日本からの参加者と過ごす機会があったが、受賞者のレクチャーや各々が参加してきたディスカッションの内容を自分の言葉で説明したり、また他の参加者の言葉で聞いたりすることで理解を深めることができた。日本の参加者との議論はそれぞれの分野が異なるがゆえに、理解の切り口が異なり、自分一人で参加するよりも非常に理解が深まったと思う。また、こうした議論を通じて改めて日本について客観的に見た上で他の国の参加者と話し合うことができた。

参加者が申請時に博士課程学生やポスドクであったことから、年代が近くキャリアに対する悩みを共有し、今後の研究の方向性に関して考えるきっかけができた。国内の同世代の研究者との出会いは、共同研究の可能性も含め今後も大切にしていきたい。

5. その他に、リンダウ会議への参加を通して得られた研究活動におけるメリット、具体的な研究交流の展望がもてた場合にはその予定等を記載すること。

他の活動を通して得られたメリットの一つは、UBS 銀行から招待されたディナーに参加することで、実務と研究の近い関係を実感できたことである。運よく私は UBS 銀行からディナーへの招待を受けたが、私の研究分野は家計や家族であり、金融や銀行の行動について分析していないこと、また参加者の多くがバンカーであったことから少し気後れしていた。

しかし、代表者がスピーチで、「顧客の行動を知りたい、理解したい。そのために、個人の行動を理解しようとする研究は重要である」と話していた。そこで会った参加者と理解したことは、私たちがイメージするような、企業にとって会社の利益に直接影響する分野だけでなく、家計、顧客の行動を理解するような経済学の研究も求められているということである。このことは、自分の専門とする分野と社会とのつながりを改めて強く感じることができ、今後の励みになった。

6. リンダウ会議への参加を通して得られた以上の成果を今後どのように日本国内に還元できると思うか。

我が国に今回の経験を還元する方法として3つ考えられる。

第一に、講演やディスカッションで得た研究のヒントやアイデアを活かして形にすることである。自分が研究を進めることによって、リンダウ会議の参加の経験が生かされた研究を進めることができる。

第二に、国際ネットワークを大切にすることを再認識したので、リンダウ会議で構築したネットワークをはじめ、これまで築いてきた国際および国内の研究ネットワークを活かしていきたいと思う。また彼らと研究交流することで、我が国と海外との研究を融合させることができる。

第三に、本会議において培われてきた「若手研究者を育てよう」という精神を理解し、将来につなげていくべきである。世界最高峰の賞を得た研究者と私たち若手研究者が交流の機会を持つことができたのは、多くの方々のおかげであり、こうした方々の若手研究者を育てようという精神によるものだと思う。今はまだ私自身が若手に分類されるのでできることは少ないが、こうした機会を得たことに感謝しながら、自分より若い世代の研究者が世界を意識した研究に向けたプラスの新しいチャンスを得られるように協力するべきであると思った。

7. 今後、リンダウ会議に参加を希望する者へのアドバイスやメッセージがあれば記載すること。

十数名ものノーベル経済学賞受賞者や、世界中の若手研究者と一度に出会える機会は他にないと思います。貴重な機会を十分活かすよう、積極的に参加してください。